



自伝的エピソード記憶想起に伴う主観的特性と感情の関係について－自伝的記憶の主観的特性質問紙を用いた検討－

著者	関口 理久子
雑誌名	関西大学心理学研究
巻	3
ページ	15-26
発行年	2012-03
その他のタイトル	Relationship between subjective properties associated with remembering autobiographical episodic memories, and emotion: Investigation by the subjective properties questionnaire of autobiographical memory
URL	http://hdl.handle.net/10112/6857

自伝的エピソード記憶想起に伴う主観的特性と感情の関係について

— 自伝的記憶の主観的特性質問紙を用いた検討 —

関 口 理久子 関西大学社会学部

Relationship between subjective properties associated with remembering autobiographical episodic memories, and emotion: Investigation by the subjective properties questionnaire of autobiographical memory

Rikuko SEKIGUCHI (Faculty of Sociology, Kansai University)

This study was designed to revise the subjective properties questionnaire of autobiographical memory (Sekiguchi, 2011)(Study 1), and investigated the subjective properties of emotional autobiographical episodes by the revised one(Study 2), and the relationship to the individual differences of depressive mood, subjective well-being and emotion regulation(Study 3). The result of Study 1 revealed that exploratory and confirmatory factor analysis of 16 items of the state during recollection showed five factor structures (perceptual vividness/verbal details / sense of re-experience /emotional intensity/emotional valence). The result of Study 2 revealed that the comparison of subjective properties during recollection of positive, negative and neutral events showed that almost all properties of positive events were significantly higher than those of negative or neutral events. The result of Study 3 revealed as follows. 1) The perceptual vividness, verbal details and emotional intensity elicited by the individuals with high subjective well-being were higher than those with low subjective well-being. 2) The verbal details of elicited by the individuals with low depressive mood were higher than those with high depressive mood. 3)The Individuals using suppressive strategy or reappraisal strategy of emotion regulation showed no significant differences in any properties of autobiographical memories.

Key words: autobiographical episodic memory, subjective properties, depressive mood, subjective well-being, emotion regulation.

Kansai University Psychological Research
2012, No.3, pp.15-26

近年、自伝的エピソード記憶の想起時の主観的な再体験感を測定するために、想起された記憶についての現象学的特性 (phenomenological characteristics) を尋ねる質問紙、例えば、記憶特性検査 (Memory Characteristic Questionnaire, 以下 MCQ, Johnson, Foley, Suengas & Raye, 1988) や自

伝的記憶質問紙 (Autobiographical Memory Questionnaire, 以下 AMQ, Rubin, Schrauf, & Greenberg, 2003) が開発されている。MCQは想像された出来事と体験した出来事の弁別のために作成されたものであり、AMQは自伝的記憶の現象学的特性について測定するために作成されたもので、想

起された自伝的エピソードについて、記憶の想起特性（再現感）と確信度、知覚的詳細さ、言語的詳細さ、情動価と情動強度について評価するものである。また、Sutin & Robins (2007) は記憶経験質問紙 (Memory Experiences Questionnaire, 以下 MEQ) を作成しており、日本語版としても、清水・高橋 (2002) による日本語版 MCQ、佐藤 (2007) による AMQ と MCQ を参考にした想起特性についての質問紙などが作成されている。

これらの自伝的記憶の想起に伴う主観的特性を測定する質問紙を利用し、多くの研究が行われている。例えば、情動的な自伝的記憶の想起に伴う主観的諸特性について検討 (Talarico, Labar & Rubin, 2004; Rubin et al., 2003)、健常者や PTSD の患者における主観的特性やその時間的推移の検討 (Rubin, 2010; Rubin, Boals & Klein, 2010)、情動的な自伝的記憶の神経基盤についての fMRI による研究 (Greenberg, Rice, Cooper, Cabeza, Rubin, & LaBar, 2005)、自伝的記憶の感情調節方略や視覚的イメージ力との関連とその個人差の検討 (D'Argembeau & Linden, 2006)、健忘症患者の研究 (朴・大東, 2008) などである。

関口 (2011) は、AMQ や MCQ などの自伝的エピソード記憶の主観的な想起特性を尋ねる質問紙、および、TEMPau (Piolino, Desgranges, Belliard, Matuszewski, Lalevée, de la Sayette & Eustache, 2003; 関口, 2010) などの自伝的エピソード記憶の想起状態や特異性を測定する半構造化インタビューによる検査を参考にして、自伝的エピソード記憶の想起時の主観的特性について総合的に評価する質問紙を作成することを試みた。

本研究は、関口 (2011) の自伝的記憶の主観的特性質問紙 (Subjective Properties Questionnaire of autobiographical memory, AMSPQ) を用いて自伝的エピソード記憶想起時の主観的特性と感情の関連について検討することを目的とし、予備的な研究として行われた。研究 1 は、自伝的記憶の主観的特性質問紙 (関口, 2011) の改訂版の作成を目的として行われた。研究 2 は、中立的・肯定的・否定的感情を伴う自伝的エピソード記憶を想起させ、その相違点を明らかにすることを目的として行われた。研究 3 は、抑うつ気分、主観的幸福感、感情調節との関連の検討することを目的として行われた。

研究 1：自伝的記憶の主観的特性質問紙の改訂版の作成

関口 (2011) の自伝的記憶の主観的特性質問紙では、因子構造上の問題が検討課題として残されていた。特に、全体が 6 因子構造となり、第 1 因子は、言語に関する項目と空間的イメージの鮮明さが混在するものとなった。また、知覚的再現感では、第 2 因子に視聴覚的鮮明さ、第 6 因子に嗅覚・触覚的鮮明さと分かれた結果となった。

研究 1 では、関口・鈴木 (2010) のうち、自伝的記憶の特性質問紙および主観的幸福感のデータのみを用い、想起状態についての質問項目のみについて再度因子構造を検討するとともに、改訂版の作成を試みた。

方法

調査参加者 若年成人 256 名 (男 105、女 151)、平均年齢 21.1 歳 (18 歳～29 歳)。

質問紙の構成

- (1) 出来事についての言語記述 過去 3 ヶ月間に生じた特定の出来事についての自伝的記憶について言語的に自由記述するよう教示された。
- (2) 想起時の状態についての質問項目 自伝的記憶の主観的特性質問紙 (関口, 2011) の 20 項目を用いた。あてはまる程度または感じる程度を 5 件法により尋ねた。
- (3) 主観的幸福感尺度 (島井・大竹・宇津木・池見・Lyubomirsky, 2004) 主観的な全般的な幸福感を測定する Subjective Happiness Scale (SHS, Lyubomirsky & Lepper, 1999) の日本語版であり、4 つの質問項目から構成され、7 件法で回答するものである。

手続き 参加者は、(1)～(3)で構成された質問紙を施行する前に、フェイス項目として性別・年齢を尋ねられた。

データ分析法 質問紙のうち、出来事についての言語的記載については、文章の場合は文節数、単語の羅列の場合には単語数を計測した。想起時の状態についての 20 個の質問項目については、主因子法・プロマックス回転による探索的因子分析および最尤法による確認的因子分析を行った。主観的幸福感尺度は合計点を算出し、記憶の主観的特性質問紙の下位

Table 1 想起時の状態の質問項目についての探索的因子分析の結果

質問項目	α 係数	因子負荷量					共通性
		1	2	3	4	5	
知覚的鮮明さ (Perceptual vividness, PV)	その時の音や声は今聞こえるかのように感じる	.724	-.124	.077	.165	.003	.609
	その時に自分や誰かが話しているのが聞こえるかのように感じる	.712	-.030	.113	.109	.001	.574
	その出来事が起こった時の情景が思い浮かぶ	.524	.170	-.099	.072	.046	.486
	その出来事が起こった時の空間的レイアウトが思い浮かぶ	.518	.207	-.095	-.061	.034	.401
	その時の手触りや肌触りが今蘇ってくるかのように感じる	.490	-.036	-.135	-.013	.249	.406
言語的詳細さ (Verbal details, VD)	その時の匂いや香りが今蘇ってくるように感じる	.490	.001	-.101	-.055	.251	.387
	細かい点まで思い出し、詳しく話すことができる	-.121	.875	.039	.070	.087	.793
	その出来事を、筋の通った物語のように話すことができる	.066	.740	.042	-.065	.043	.573
情動価 (Emotional Valence, EV)	時期や内容が不鮮明で、大まかなことしか思い出せない	-.127	-.651	-.032	.039	.178	.394
	その感情は、非常に否定的 (ネガティブ) である	-.026	.090	.925	.065	.109	.835
	その感情は、非常に肯定的 (ポジティブ) である	.025	-.067	-.902	-.003	.097	.817
再体験感 (Sense of re-experience, SR)	その出来事を今見ているかのように感じる	.329	-.071	.027	.685	-.163	.685
	その出来事を今体験しているかのように感じる	.162	.006	.128	.665	-.063	.549
感情強度 (Emotional intensity, EI)	その出来事を実際に体験した時と同じ種類の感情を感じる	-.138	.101	-.092	.588	.271	.528
	心臓がドキドキするように感じる	.189	-.108	.002	-.059	.763	.613
	その感情は、非常に強烈である	.130	.091	.043	.153	.542	.532

尺度得点や記述語数とのピアソンの積率相関係数を算出した。

結果

探索的因子分析の結果、5因子構造が確認された。第1因子は知覚的鮮明さ (perceptual vividness, PV)、第2因子は言語的詳細 (verbal details, VD)、第3因子は感情価 (emotional valence, EV)、第4因子は再現感 (sense of re-experience, SR)、第5因子は感情強度 (emotional intensity, EI) であった。因子負荷量が0.40以下のものや複数因子に負荷が高い質問項目を4個削除した。その結果、記憶の主観的特性質問紙の想起時状態については、知覚的な鮮明さ(6)、再体験感(3)、言語的詳細さ(3)、感情の強度(2)と感情価(2)、合計16項目に分けられることが示された (Table 1)。

確認的因子分析を行った結果、5因子間に相関があるモデルでは適合度が悪かった ($\chi^2=314.63$ (df = 97, $p < .001$), $GFI = .859$, $AGFI = .803$, $CFI = .873$, $RMSEA = .094$)。そこで、感情価を除く4因子間には相関があり、感情価は知覚的鮮明さとのみ相関があるモデルとした。さらに、質問項目のうち、相関が高く内容が類似している項目、すなわち、知覚的

鮮明さのうち、「その時の音や声は今聞こえるかのように感じる」と「その時に自分や誰かが話しているのが聞こえるかのように感じる」の誤差間、「その出来事が起こった時の情景が思い浮かぶ」と「その出来事が起こった時の空間的レイアウトが思い浮かぶ」の誤差間、「その時の手触りや肌触りが今蘇ってくるかのように感じる」と「その時の匂いや香りが今蘇ってくるように感じる」の誤差間、また、言語的詳細さの「細かい点まで思い出し、詳しく話すことができる」と「その出来事を、筋の通った物語のように話すことができる」の誤差間に相関を導入した結果、適合度が改善された ($\chi^2=201.23$ (df = 92, $p < .001$), $GFI = .913$, $AGFI = .872$, $CFI = .936$, $RMSEA = .068$)。

自伝的記憶の主観的特性質問紙の記述語数と下位尺度得点と主観的幸福感の間の相関分析を行った結果を Table 2 に示した。主観的幸福感とは再体験感を除く全ての下位尺度と正の相関が有意かつ有意傾向であることが示された (知覚的鮮明さ: $r = .14$, $p < .05$; 言語的詳細さ: $r = .18$, $p < .01$; 感情価: $r = .14$, $p < .05$; 感情強度: $r = .12$, $p < .07$)。また、記述語数については、知覚的鮮明さおよび再体験感と有意な正の相関が示された (知覚的鮮明さ: $r = .22$, $p < .001$; 再体

Table 2 自伝的記憶の主観的特性質問紙 (AMSPQ) の下位尺度と再生語数や主観的幸福感との相関

	1	2	3	4	5	6
1. 主観的幸福感	-					
A						
M						
S						
P						
Q						
2. 知覚的鮮明さ (Perceptual vividness)	.142 *	-				
3. 言語的詳細さ (Verbal details)	.177 **	.360 ***	-			
4. 感情価 (Emotional valence)	.135 *	.141 *	.087	-		
5. 再体験感 (Sense of re-experience)	.070	.571 ***	.293 ***	.027	-	
6. 感情強度 (emotional intensity)	.117 †	.527 ***	.346 ***	.041	.422 ***	-
7. 記述語数	.129 *	.218 ***	.102	.054	.230 ***	.039

† : $p < .07$, * : $p < .05$, ** : $p < .01$, *** : $p < .001$

験感 : $r = .23, p < .001$ 。

考 察

想起時の意識状態や感情についての20個の質問項目について探索的因子分析を行った結果から、5因子構造が認められた。先行研究における問題点であった知覚的な鮮明さの質問項目が、視覚・聴覚と触覚・嗅覚とに分離した点、言語的な詳細さと空間的なレイアウトやシーンの鮮明感が同じ因子に負荷した点などは改善された。また、確認的因子分析により、情動価は知覚的鮮明さとのみ相関がある5因子構造が妥当であり、知覚的鮮明さでは、聴覚的鮮明感の項目間、情景と空間レイアウトの項目間、触覚と嗅覚の項目間に相関があることが示されたといえる。

Talarico et al. (2004) の AMQ では、質問項目はすべて独立した項目として因子分析による検討は行っていないので、Sutin&Robins (2007) の MEQ と比較すると、MEQ は、鮮明さ (vividness)、一貫性 (coherence)、感覚的詳細さ (sensory details)、情動強度 (emotional intensity)、情動価 (valence)、検索のしやすさ (accessibility)、時間的距離感 (time perspective)、視点 (visual perspective)、共有 (sharing)、心理的距離 (distancing) の10の因子構造を示している。本研究の再体験感と知覚的鮮明さは、Sutin&Robins (2007) のが感覚的詳細さと鮮明さの一部に対応すると考えられる。また、情動強度と情動価は同様であり、言語的詳細さについては一貫性に一部対応するものである。

主観的幸福感については、研究3で詳細に検討するが、自伝的記憶の主観的特性と正の相関が高いことが示された。

記述語数については、言語的な詳細さには相関が認められず、知覚的鮮明さや再体験感と正の相関が認められた。この点については、本研究での教示は、

詳細な記述を求めるものではなく、「思い出した出来事について、数語で簡単に書いてみてください。自分にだけわかる表現 (例えば単語の羅列など) で結構です。」という教示であったことが影響した可能性が考えられる。

研究2：中立的・肯定的・否定的感情を伴う自伝的エピソード記憶の主観的特性の検討

情動的な自伝的記憶の想起に伴う主観的な現象学的特性についての AMQ による研究では、肯定的感情価をもつ出来事の記憶の方が、否定的な感情価をもつ出来事よりも、感覚一文脈の詳細さが多く、視野の視点を持ちやすいこと、感情価にかかわらず情動的に強い記憶ほど鮮明に思い出すことなどが示されている (Talarico et al., 2004)。関口 (2010) においても、肯定的出来事が他の出来事より多くの主観的特性で有意に評定値が大きいことが示されている。そこで、研究2の第1の目的は、研究1により因子構造が確認され、改訂された想起状態の質問項目を用いて、中立的・肯定的・否定的感情を伴う自伝的エピソード記憶の主観的特性の検討を行うことである。

自伝的エピソード記憶の再生時の心的に立ち戻る感覚、すなわち自己認識的意識 (autonoetic consciousness) は、エピソード記憶の特性と定義されている (Tulving, 2002; 榊, 2006)。一方、単に事実を再生する場合にはそのような感覚が意識されず、単に熟知感または知っている感覚が意識されるだけであり、このような意識は認識的意識 (noetic consciousness) と言われ (Tulving, 2002; Gardiner, 2001)、これらの意識状態は、課題手続き上では、「思い出している/知っているパラダイム (Remember (R) /Know (K) paradigm)」により確かめること

ができるとされている (Tulving, 1985; Gardiner et al., 1998; Gardiner, 2001)。そこで、研究2の第2の目的は、感情価の異なる出来事を再生した場合に、R反応やK反応に相違があるのかどうかを検討する。

仮説としては、先行研究と同様に、知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、再体験感、においては肯定的出来事の想起時の方が主観的特性が高く、K反応よりR反応が多く、視野の視点を持ちやすいと予測される。また感情価は、各出来事に対応したものとなり、感情強度は肯定的出来事と否定的出来事で高く、中立的出来事では低いと予測される。

方法

調査参加者 研究1とは異なる成人44名に質問紙を施行した。そのうち全てに欠損値なく回答した成人39名(男14、女25)、平均年齢25.6歳(22歳～57歳)のデータを用いた。

質問紙の構成 (Appendix 1)

- (1) 出来事についての言語記述 特定の出来事についての自伝的記憶について言語的に自由記述するよう教示された。特定の出来事は、単語手がかり法による研究(関口・竹中, 2005)で用いられた単語から、否定的情動語として「怒り」、肯定的情動語として「うれしい」、中立語として「車」を選択し、それぞれ「怒った出来事」、「うれしいと思った出来事」、「車という語を見て思い出した出来事」とした。
- (2) 想起時の状態についての質問項目 研究1により作成した16項目を用い、あてはまる程度または感じる程度(1:全く～7:非常に、7件法)を尋ねた。
- (3) 自己認識的意識(覚えている/知っている、以下R/K) TEMPau (Piolino et al., 2003) および日本語版TEMPau (関口, 2010)を参考にして作成した。思い出している(R)か知っている(K)の2項目にどちらともいえないという項目を加えた。
- (4) 視野/観察者視点 TEMPau (Piolino et al., 2003) および日本語版TEMPau (関口, 2010)を参考にして作成した。視野視点については言語表記に図示を加え、視野視点、観察者視点、両方の視点の3件法で尋ねるものであった。

手続き 参加者は、(1)～(4)で構成された質問紙を施

行する前に、フェイス項目として性別・年齢を尋ねられた。

データ分析方法 質問紙のうち、出来事についての言語的記載については、文章の場合は文節数、単語の羅列の場合には単語数を計測した。想起時の状態についての16個の質問項目については、下位尺度得点を算出した。情動価については、項目14 (Appendix 1)を逆転項目とし、肯定的な感情で得点が高くなるように計算した。出来事的情動価(肯定的・否定的・中立的)を独立変数(参加者内変数)、下位尺度得点を従属変数として1要因の分散分析を行った。自己認識的意識(R/K)と視野/観察者視点については、出来事的情動価(肯定的・否定的・中立的)により選択肢が異なるかどうかをFriedman検定により行い、その際の多重比較はWilcoxonの符号付き順位検定により行った。

結果

再生語数については、出来事的情動価の主効果が有意($F(2, 76) = 5.86, p < .01$)であり、多重比較の結果、中立と否定的出来事間に差はなく、肯定的出来事とは有意に差があり、中立的出来事の方が個数が多かった($p < .01$) (Figure 1)。

知覚的鮮明さについては、出来事的情動価の主効果が有意($F(2, 76) = 22.48, p < .001$)であり、多重比較の結果、中立的出来事(肯定的出来事)否定的出来事となり (Figure 2)、中立的出来事が最も高かった($p < .01$)。言語的詳細については、出来事的情動価の主効果が有意($F(2, 76) = 4.48, p < .02$)であり、多重比較の結果、肯定的な出来事が有意に高く($p < .05$)、中立的出来事と否定的出来事には差は認められなかった (Figure 3)。感情価については、出来事の感情価の主効果が有意($F(2, 76) = 124.68, p < .001$)であり、多重比較の結果、肯定的出来事(中立的出来事)否定的出来事となり (Figure 4)、肯定的出来事が最も肯定的情動価が高かった($p < .01$)。再体験感については、出来事的情動価の主効果が有意($F(2, 76) = 13.05, p < .001$)であり、多重比較の結果、肯定的な出来事が有意に高く($p < .01$)、中立的出来事と否定的出来事には差は認められなかった (Figure 5)。感情強度については、出来事的情動価の主効果が有意($F(2, 76) = 9.34, p < .001$)であり、多重比較の結果、肯定的出来事と否定的出来事間に差はなく、中立的出来事は

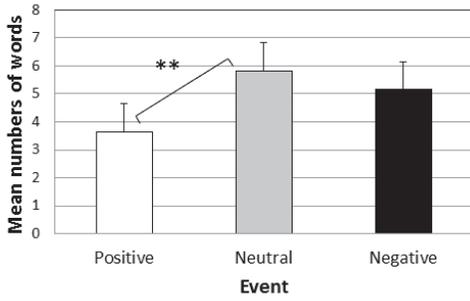


Figure 1 各出来事における平均再生個数

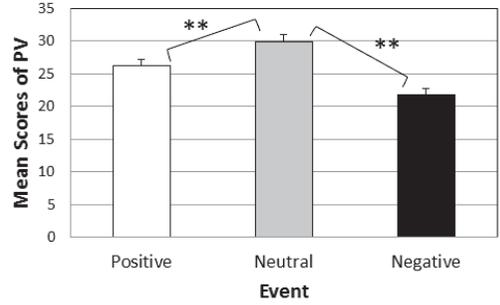


Figure 2 各出来事における知覚的鮮明さ (PV) の平均評定値

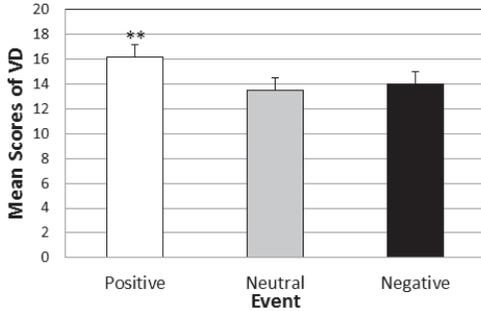


Figure 3 各出来事における言語的詳細さ (VD) の平均評定値

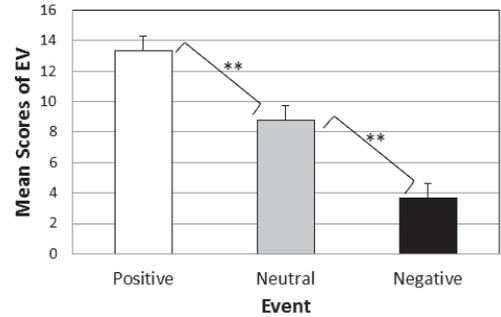


Figure 4 各出来事における感情価 (EV) の平均評定値

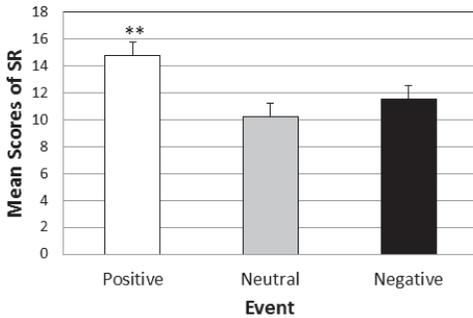


Figure 5 各出来事における再体験 (SR) の平均評定値

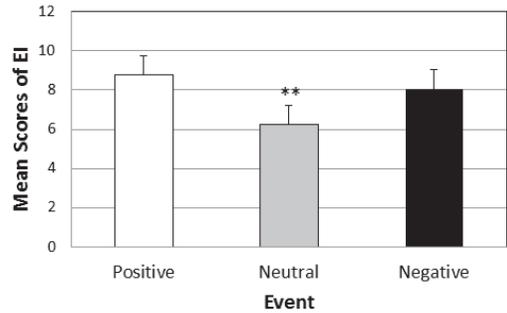


Figure 6 各出来事における感情強度 (EI) の平均評定値

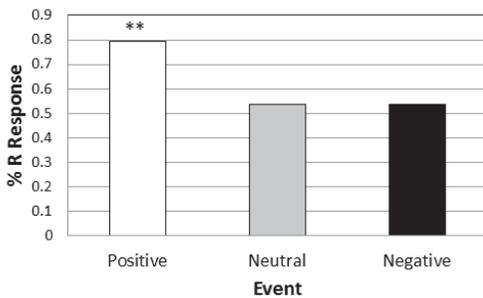


Figure 7 各出来事における Remember 反応 (R-Response) の比率

有意に低かった ($p < .01$) (Figure 6)。

自己認識的意識 (R/K) については、Friedman 検定の結果有意であり ($\chi^2(2) = 9.65, p < .01$)、多重比較の結果、肯定的出来事が中立的および否定的出来事に比べ R 反応の選択が多かった (Figure 7) が、中立的と否定的出来事間には差は認められなかった (肯定と中立: $Z = -2.67, p < .01$; 肯定と否定: $Z = -2.67, p < .01$; 否定と中立: $Z = -0.26, n.s.$)。

視野／観察者視点については、Friedman 検定の結果、有意差は認められなかった ($\chi^2(2) = 2.74, n.s.$)。

考 察

知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、再体験感、については肯定的出来事の想起の方が否定的出来事より高かった。言語的詳細さ、再体験感については仮説通りの結果であったが、知覚的鮮明さでは中立的出来事の想起時の方が最も高い結果となった。感情価と感情強度については仮説通りであり、感情価は各出来事に対応したものとなり、感情強度は肯定的出来事と否定的出来事で高く中立的出来事では低い結果となった。

知覚的鮮明さにおいて仮説と異なり中立的出来事が最も高くなったのは、中立的な出来事の想起のみ「車という語を見て思い出した出来事」と具体的事物についての自伝的記憶を誘導しており、「うれしい」や「怒った」記憶とは異なり知覚的鮮明さを伴いやすい記憶であった可能性が考えられる。

肯定的出来事の想起時の方が R 反応が多いことは仮説どおり示されたが、視野の視点については有意な差は認められなかった。視野視点については、Talarico et al. (2004) では認められているが、関口 (2011) では有意な差が認められていない。Nigro & Neisser (1983) は、最近の記憶を再生するときには、体験時と同じ視野視点で思い出しているが、昔の記憶を再生するときには第三者の観察者の視点で思い出しているとしている。さらに、この2種類の視点は、最近の鮮明な記憶の場合には両方の視点で思い出すことが容易であるが、昔の鮮明でない記憶の場合には困難であり、この視点の転換は自己認識的意識と認識的意識の転換に対応しているとされている (Robinson & Swanson, 1993)。研究2においては、時間的な制約を設けずに自伝的記憶再生を誘導したので、差が認められなかった可能性があり、例

えば、時期を指定して再生させる (最近6ヶ月とか高校生時代など) 方法を用いると視点の差が明らかになるのではと考えられる。

研究3：自伝的エピソード記憶の主観的特性と主観的幸福感、抑うつ気分、感情調節の個人差との関連についての検討

自伝的記憶の再生と感情については非常に多くの研究されている。

Williams & Scott (1988) は、情動語を提示し自伝的エピソードを再生させる単語手がかり法を用いて大うつ病 (major depressive disorder, MDD) の患者の自伝的記憶を検討し、大うつ病患者は健康な者に比べて、情動語については具体的な自伝的エピソードをほとんど再生しない傾向があることを示した (Williams & Scott, 1988; Brittlebank, Scott, Williams & Ferrier, 1993)。このような MDD の患者の自伝的記憶の特徴を記憶を過度に一般化された記憶 (overgeneral memory) と呼ばれている (Williams, 1999)。例えば、自伝的エピソードの再生に際しては、通常は時空間に定位された個人的なある特定のエピソードを再生する (例えば、「後悔」という単語で再生したエピソードが、「先週の日曜日にデートの待ち合わせの時間に30分遅れて待たせた」など) が、MDD の患者では、エピソードが過度に一般化または抽象化され、特定の時空間的情報が欠落したり、1日以上繰り返しの出来事の想起になる (例えば、「後悔」という単語で再生したエピソードが、「母に嘘をついた時」など) 特徴を持っている。また、このような過度に一般化された記憶は、MDD の患者の認知的特徴を評価する方法として用いられている (Williams, 1999; Nandorino, Pezard, Poste, Réveillère & Beaune, 2002)。

Gross & John (2003) は、感情の調節には、2種類の方略があり、感情の表出を抑制する方略つまり抑制方略と、感情が生じた状況についての考え方や認知を変えて感情をコントロールする方略つまり再評価方略の2種類があるとした。これらの2種類の方略の使用にはかなりの個人差があり、日常的にどちらの方略をよく使用するかという個人差を測定するために感情調節質問紙 (Emotional Regulation Questionnaire, ERQ) が開発された。抑制方略を常に用いる者は、肯定的な感情は経験せず表出もしな

いが、否定的な感情は行動的に表出しないが強く経験はしており、他者と感情的に親密な関係を持ちにくく、個人的な well-being のレベルも低いが、一方、再評価方略を常に用いる者は、肯定的な感情を経験し表出しやすく、否定的な感情を経験せず表出しにくく、他者と感情的に親密な関係を持ち、自尊感情も高く、個人的な well-being の高いレベルを持つ。さらに、抑制方略を常に用いる者は、客観的な記憶や自己に関する出来事に対する記憶が悪いこと (Richards & Gross, 2000; Gross, 2002) や過去の出来事の想起に伴う感覚的な特性や文脈のおよび感情的な詳細さが少ないこと (D' Argembeau & Van der Linden, 2006) などの記憶への影響も示されている。Wisco & Nolen-Hoeksema (2010) は、情動的自伝的記憶の想起と抑うつ気分および感情調節の個人差について検討し、自伝的記憶の情動価は、気分と感情調節の両方の影響を受け、特に、再評価方略は肯定的な自伝的記憶の想起を増加させることを示している。

自伝的記憶の想起時における出来事的情動価との関連では、肯定的な出来事の方が否定的出来事より多く再生されるというポジティブバイアスが報告されている (Byrne, Hyman, Jr. & Scott, 2001 ; D' Argenbeau & Van der Linden, 2008) が、一貫した結果が報告されていない (D' Argenbeau & Van der Linden, 2008)。

研究3では、以上のような先行研究を踏まえて、研究1において作成した記憶の主観的特性質問紙を用いて、自伝的エピソード記憶の主観的特性と主観的幸福感、抑うつ気分、感情調節の個人差との関連について、また、自伝的記憶の再生時のポジティブバイアスが示されるかどうかについて、予備的に検討することを目的として行う。仮説としては、抑うつ傾向が高い者や抑制方略を用いる者は、主観的特性のうち知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、再体験感が低く、感情価も否定的であることが示されると予測される。また、主観的幸福感が高い者や再評価方略を行う者は主観的特性のうち知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、再体験感が高く、感情価も肯定的であることが示されると予測される。

方 法

調査参加者 研究1および研究2とは異なる大学生54名(男21, 女33)、平均年齢19.15歳(18歳～

22歳)。

質問紙の構成

- (1) 研究2で用いた記憶の主観的特性質問紙を用いた。ただし、出来事についての想起は、最近1年間に生じた特定の出来事について想起し、その自伝的記憶について回答するよう教示された。
- (2) 日本版 ERQ (吉津・関口・雨宮, 未刊行) 感情の調節を行う際の個人差について測定することを目的として開発された Emotional Regulation Questionnaire (ERQ, Gross & John, 2003) に基づいて作成された日本語版である。再評価と抑制の2つの下位尺度から構成され、7件法(非常にあてはまる～全くあてはまらない)で回答するものである。
- (3) 日本語版自己記入式抑うつ性尺度(日本版 SDS, 福田・小林, 1983) Zung (1965) の開発した自己記入式抑うつ性尺度 (Self-rating Depression Scale ; 以下 SDS) の日本語版であり、現在の気分や身体の状態について尋ねる20項目(陽性項目10, 陰性項目10)から構成され、4件法(1:ないか, たまにある～4:ほとんどいつもある)で回答するものである。
- (4) 日本版主観的幸福感尺度(島井・大竹・宇津木・池見・Lyubomirsky, 2004) 研究1で用いた質問紙と同様のものを用いた。

手続き 参加者は、(1)～(4)で構成された質問紙を施行する前に、フェイス項目として性別・年齢を尋ねられた。

データ分析方法 記憶の主観的特性質問紙の下位尺度得点、ERQの下位尺度得点、SDSとSHSの合計点を算出した。ERQの再評価得点と抑制得点、SDSとSHS合計点により、高得点群と低得点群をそれぞれ選び、記憶の主観的特性質問紙の下位尺度得点を従属変数としてt検定を行った。各尺度によるカットオフポイントの決定に際しては、先行研究および研究1のデータを参考に行った。SHSは、本研究の研究1による調査により、16点以下を低幸福感群、21点以上を高幸福感群とした。ERQ抑制得点は、吉津・関口・雨宮(未刊行)における成人405名に行った調査により、12点以下を低抑制群、19点以上を高抑制群とした。SDSについては、関口・竹中(2005)の大学生129名に行った調査の結果から、36点以下を低抑うつ群、49点以上を高抑うつ群とした(Table 3)。

Table 3 ERQ、SDS および SHS の平均値とカットオフポイントの基準値 (25%と 75%境界値)

	ERQ (n=405) ^{a)}		SDS (n=156) ^{b)}	SHS (n=256) ^{c)}
	Reappraisal	Suppression		
Mean	26.0	15.3	42.0	18.5
Percentile 25%	23.0	12.0	36.0	16.0
75%	30.0	19.0	49.0	21.0

a) 吉津・関口・雨宮 (未刊行)、b) 関口・竹中 (2005)、c) 研究1

ポジティブバイアスの分析については、記憶特性質問紙の情動価の合計点により、4点以下を否定的エピソード、8点以上を肯定的エピソードとして分類し、自伝的記憶再生におけるポジティブバイアスが見られるかどうかを χ^2 検定により検定した。有意差が認められた場合の多重比較は、Bonferroniの検定により行った。

結果

各参加者が再生した自伝的記憶を感情価により分類したところ、感情価得点が4点以下の否定的エピソード再生が9人、5点から7点の中立エピソード再生が4人、8点以上の肯定的エピソード再生が41人であった (Figure 8)。自伝的記憶再生時のポジティブバイアスがあることが示された ($\chi^2(2)=44.78, p<.001$)。肯定的エピソード再生が否定的エピソード再生や中立のエピソード再生より有意に多く (それぞれ $p<.0001$)、否定的エピソード再生や中立のエピソード再生には差は認められなかった。

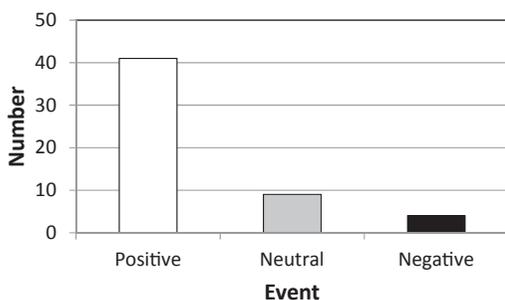


Figure 8 各出来事の再生人数

ERQの下位尺度、SDS、SHSによる高群と低群の人数および平均値およびSDはTable 4に示した。

高抑うつ群と低抑うつ群の比較では、言語的詳細さには有意差が認められ ($t(12)=2.75, p<.02$)、抑うつ低群の方が言語的詳細さが高かった。その他の主観的特性には有意差は認められなかった (知覚的

鮮明さ: $t(12)=-.15$; 感情価: $t(12)=-.08$; 再体験感: $t(12)=-.49$; 感情強度: $t(12)=.53$, いずれも *n.s.*)。

高幸福感群と低幸福感群の比較では、知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、感情強度に有意さが認められ、高幸福感群の方が有意に高かった (知覚的鮮明さ: $t(28)=-2.26$; 言語的詳細さ: $t(28)=-2.33$; 感情強度: $t(28)=-2.71$, いずれも $p<.03$)。感情価と再体験感には有意差は認められなかった (感情価: $t(28)=-1.26$; 再体験感: $t(28)=-1.65$ いずれも *n.s.*)。

感情の再評価の高低群の比較ではいずれの主観的特性にも有意差は認められなかった (知覚的鮮明さ: $t(32)=1.59$; 言語的詳細さ: $t(32)=.09$; 感情価: $t(32)=.97$; 再体験感: $t(32)=.90$; 感情強度: $t(32)=.43$, いずれも *n.s.*)。また、抑制の高低群の比較でもいずれの主観的特性にも有意差は認められなかった (知覚的鮮明さ: $t(24)=1.08$; 言語的詳細さ: $t(24)=.73$; 感情価: $t(24)=.83$; 再体験感: $t(24)=.08$; 感情強度: $t(24)=.118$, いずれも *n.s.*)。

考察

抑うつ傾向が高い者については、言語的詳細さが有意に低いことが示されたが、知覚的鮮明さや再体験感については有意な差は認められなかった。言語的詳細さに有意な差が認められたことは、抑うつ傾向と過度に一般化された記憶の関連から考えると興味深い。本研究では、大うつ病の患者ではなく健常者における抑うつ傾向が高い者であったが、抑うつ気分の高さが客観的なエピソードの乏しさに影響するだけでなく、「詳しく話せない」という主観的な感覚とも関連していることが示唆される。

主観的幸福感が高い者は、知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、感情強度が高いことが示されたが、感情価も再体験感も差は示されなかった。研究1において、主観的幸福感とは再体験感以外の主観的特性と正の相

Table 4 ERQの低位尺度、SDS、SHSによる高群と低群の平均値およびSD

	SDS				SHS				ERQ-Reappraisal				ERQ-Suppression			
	low (n=7)		high (n=9)		low (n=13)		high (n=17)		low (n=14)		high (n=20)		low (n=13)		high (n=13)	
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD
尺度得点	33.4	2.6	54.6	4.7	13.3	3.3	22.6	1.8	20.4	1.8	32.2	2.3	9.8	2.4	20.3	1.2
知覚的鮮明さ (Perceptual vividness, PV)	27.0	7.3	27.6	7.3	22.4	9.1	28.9	6.7	28.6	9.8	24.2	6.5	27.4	8.6	24.0	7.3
言語的詳細さ (Verbal details, VD)	19.7	2.2	14.6	5.0	14.8	4.3	18.1	3.4	16.4	4.4	16.3	4.3	17.3	3.1	16.3	3.9
情動価 (Emotional Valence, EV)	9.6	5.5	9.8	4.7	9.5	4.2	11.5	4.5	11.9	3.9	10.5	4.7	11.5	4.4	10.0	4.6
再体験感 (Sense of re-experience, SR)	11.7	5.0	12.8	3.7	10.9	5.2	13.8	4.5	13.9	5.0	12.4	4.4	13.2	5.1	13.0	4.3
感情強度 (Emotional intensity, EI)	9.9	3.2	9.2	1.5	7.6	3.3	10.7	2.9	9.5	3.5	9.0	3.2	10.2	2.9	9.0	2.4

関が示されていたが、研究3においても、主観的幸福感の高い者は、自伝的記憶の想起時に主観的特性が高いことが示されたといえる。ただし、感情価に差がないことから、主観的幸福感が高いからと言って肯定的出来事を思い出すという傾向は示されていない。

また、本研究では、再評価方略または抑制方略を用いる者は、主観的特性のうち知覚的鮮明さ、言語的詳細さ、再体験感が低く、感情価も否定的であることが示されると予測されたが、全く有意差が認められなかった。ERQと自伝的記憶の主観的特性では、抑制方略との負の相関が示されるという報告(D'Argembeau & Van der Linden, 2006)もあるが、本研究の結果とは異なる。Wisco & Nolen-Hoeksema (2010)の研究では、自伝的記憶の情動価は、気分と感情調節の両方の影響を受け、特に、再評価方略は肯定的な自伝的記憶の想起を増加させることを示しているが、本研究ではこのような差は認められなかった。この差違については、今後さらなる検討が必要であると考えられる。

自伝的記憶再生時の主観的特性におけるポジティブバイアスについては、明確に示されたといえる。

研究3は予備的な研究のため、今後は、サンプル数を多くし、自伝的エピソード記憶の主観的特性と主観的幸福感、抑うつ気分、感情調節の個人差との関連について、総合的に検討する必要があると思われる。

総合考察

研究1および研究2では、自伝的記憶の主観的特性質問紙を改訂し、それを用いることで自伝的エピソード記憶の感情価により主観的特性に差があることが示された。研究3では、自伝的エピソード記憶の主観的特性と主観的幸福感、抑うつ気分、感情調節の個人差との関連についての検討を行うことを目的としたが、サンプル数の少ない予備的研究であるため、分析方法も限られ、明確な結果を得ることはできなかった。本研究において記憶の主観的特性質問紙が有効な測度となりうることを示したので、この質問紙を用いて研究3を補うことを目的として、今後検討を行いたいと考える。

自伝的記憶の主観的特性質問紙は、自伝的記憶の再生を促すために柔軟に使用できるという特徴を持っている。本研究では、自伝的エピソード記憶の再生を促すための教示として、特定の情動語を示した場合や時期を限定した場合などの数種の言語手がかり提示による方法を試みた。今後は、関口 (2011) で用いた感覚刺激による手がかり提示や「成功 (失敗) 体験について」などの言語手がかり提示などを行い、本研究で改訂された主観的特性質問紙による測定が可能かどうかの検討も必要と思われる。

引用文献

- Brittlebank, A.D., Scott, J., Williams, J.M.G. & Ferrier, I.N. 1993 Autobiographical memory in depression : state or trait maker? *British Journal of Psychiatry*, 162, 118-121.
- Byre, C.A., Hyman, Jr., I.E. & Scott, K.L. 2001 Comparison of memories for traumatic events and other experiences. *Applied Cognitive Psychology*, 15, 119-133.
- D'Argembeau, A. & Van der Linden, M. 2006 Individual

- differences in phenomenology of mental time travel: The effect of vivid imagery and emotion regulation strategies. *Consciousness and Cognition*, 15, 342-350.
- D'Argembeau, A. & Van der Linden 2008 Remembering pride and shame: Self-enhancement and the phenomenology of autobiographical memory. *Memory*, 16, 538-547.
- 福田一彦・小林茂雄 1983 日本版 SDS 使用手引, 三京房, 京都.
- Gardiner, J.M. 2001 Episodic memory and autoegetic consciousness: a first-person-approach. *Philosophical Transaction of the Royal Society London B*, 356, 1351-1361.
- Gardiner, J.M., Ramponi, C., & Richardson-Klavehn, A. 1998 Experiences of remembering, knowing, and guessing. *Consciousness and Cognition*, 7, 1-26.
- Greenberg, D.L., Rice, H.J., Cooper, J.J., Cabeza, R., Rubin, D.C., & LaBar, K.S. 2005, Co-activation of the amygdala, hippocampus and inferior frontal gyrus during autobiographical memory retrieval. *Neuropsychologia*, 43, 659-674.
- Gross, J.J. 2002 Emotion regulation: Affective, cognitive and social consequences. *Psychophysiology*, 39, 281-291.
- Gross, J.J. & John, O.P. 2003 Individual differences in two emotion regulation processes: Implications for affect, relationship, and well-being. *Journal of Personality and Social Psychology*, 85, 348-362.
- Johnson, M. K., Foley, M. A., Suengas, A. G., & Raye, C. L. 1988. Phenomenal characteristics of memories for perceived and imagined autobiographical events. *Journal of Experimental Psychology: General*, 117, 371-376.
- Lyubomirsky, S., & Lepper, H. S. 1999 A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. *Social Indicators Research*, 46, 137-155.
- Nandorino, J-L., Pezard, L., Poste, A., Réveillère, C. & Beaune, D. 2002 Autobiographical memory in major depression : A comparison between first-episode and recurrent patients. *Psychopathology*, 35, 335-340.
- Nigro, G & Neisser, U. 1983 point of view in personal memories. *Cognitive Psychology*, 15, 467-482.
- 朴白順・大東祥孝 2008 重篤な健忘例における自伝的記憶の検討 認知リハビリテーション, 48-55.
- Piolino, P., Desgranges, B., Belliard, S., Matuszewski, V., Lalevée, C., de la Sayette, V. & Eustache, F. 2003 Autobiographical memory and autoegetic consciousness: triple dissociation in neurodegenerative diseases. *Brain*, 126, 2203-2219.
- Richards, J.M. & Gross, J.J. 2000 Emotion regulation and memory: The cognitive costs of keeping one's cool. *Journal of Personality and Social Psychology*, 79, 410-424.
- Robinson J. A. & Swanson J. A. 1993 Field and observer modes of remembering. *Memory*, 1, 169-184.
- Rubin, D. C., Schrauf, R.W. & Greenberg, D.L. 2003 Belief and recollection of autobiographical memories. *Memory & Cognition*, 31, 887-901.
- Rubin, D. C. 2010 The coherence of memories for trauma: Evidence from posttraumatic stress disorder. *Consciousness and Cognition*, 20, 857-865.
- Rubin, D. C., Boals, A., & Klein, K. 2010 Autobiographical memories for very negative events: The effects of thinking about and rating memories. *Cognitive Therapy and Research*, 34, 35-48.
- 榊美知子 2006 エピソード記憶と意味記憶の区分—自己思维的意識に注目して. 心理学評論, 49, 627-643.
- 佐藤浩一 2007 自伝的記憶の機能と想起特性 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編, 56, 333-357.
- 清水寛之・高橋雅延 2008 特定の自伝的記憶に関する主観的評価の尺度—日本版記憶特性質問紙の標準データと因子構造—. 人文学部紀要, 28, 109-123.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見陽・Lyubomirsky, S. 2004 日本版主観的幸福感尺度 (Subjectiv. Happiness. Scale, SHS) の信頼性と妥当性の検. 日本公衆衛生雑誌, 51, 845-853.
- 関口理久子・竹中健二 2005 再生された記憶の内容に抑うつ気分が与える影響—非臨床群における検討. 関西大学社会学部紀要, 36, 62-78.
- 関口理久子 2010 自伝的エピソード記憶検査 (Test Episodique de Mémoire du Passé autobiographique, TEMPau) の日本語版作成の試. 関西大学心理学研究, 1, 41-52.
- 関口理久子・鈴木明理 2010 自伝的記憶想起に伴う主観的な現象学的特性の個人差について—再評価傾向および主観的幸福感の影響. 日本心理学会第74回大会 (於大阪大学) 発表論文集.
- 関口理久子 2011 自伝的記憶想起に伴う現象学的・主観的特性について—記憶の主観的特性質問紙を用いた検討. 関西大学心理学研究, 2, 7-17.
- Talarico, J.M., Labar, K.S. & Rubin, D.C. 2004 Emotional intensity predicts autobiographical memory experience. *Memory & Cognition*, 32, 1118-1132.
- Tulving, E. 2002 Episodic memory: from mind to brain. *Annual Review of Psychology*, 53, 1-25.
- Sutin, A.R. & Robins, R.W. 2007 Phenomenology of autobiographical memories: The Memory

Experiences Questionnaire. *Memory*, 15, 390411.
 Williams, J.M.G. & Scott, J. 1988 Autobiographical memory in depression. *Psychological Medicine*, 18, 689-695.
 Williams, J.M.G. 1999 Depression and the specificity of autobiographical memory. In Rubin, D.C. (Ed.) *Remembering our past : studies in autobiographical memory* (pp244-267). Cambridge university press, UK.

Wisco, B.E. & Nolen-Hoeksema, S. 2010 Valence of autobiographical memory: The role of mood, cognitive reappraisal and suppression. *Behaviour Research and Therapy*, 48, 335-340.
 吉津潤・関口理久子・雨宮俊彦 感情調節尺度 (Emotion Regulation Questionnaire) 日本語版の作成とパーソナリティ、感情、対人関係および well-being との関係、未刊行。
 Zung, W.W.K. 1965 A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, 12, 63-70.

Appendix 1

質問番号	項目	質問文
Q1	言語表現	思い出した出来事について、数語で簡単に書いてみてください。自分にだけわかる表現 (例えば単語の羅列など) で結構です。
Q2-01	再体験感	その出来事を今体験しているかのように感じる
Q2-02	再体験感	その出来事を今見ているかのように感じる
Q2-03	知覚的鮮明さ	その時の音や声は今聞こえるかのように感じる
Q2-04	知覚的鮮明さ	その時に自分や誰かが話しているのが聞こえるかのように感じる
Q2-05	知覚的鮮明さ	その出来事が起こった時の情景が思い浮かぶ
Q2-06	知覚的鮮明さ	その出来事が起こった時の空間的レイアウトが思い浮かぶ
Q2-07	知覚的鮮明さ	その時の匂いや香りが今蘇ってくるように感じる
Q2-08	知覚的鮮明さ	その時の手触りや肌触りが今蘇ってくるかのように感じる
Q2-09	言語的詳細さ	その出来事を、筋の通った物語のように話すことができる
Q2-10	言語的詳細さ	細かい点まで思い出し、詳しく話すことができる
Q2-11	言語的詳細さ*	時期や内容が不鮮明で、大まかなことしか思い出せない
Q2-12	再体験感	その出来事を実際に体験した時と同じ種類の感情を感じる
Q2-13	感情価	その感情は、非常に肯定的 (ポジティブ) である
Q2-14	感情価*	その感情は、非常に否定的 (ネガティブ) である
Q2-15	感情強度	その感情は、非常に強烈である
Q2-16	感情強度	心臓がドキドキするかに感じる
Q3	R/K	思い出しているときの状態は次の3つのうちどれですか? 1. まるで昨日のこのように、その時の感覚や詳細に至るまで明瞭に思い出することができる。2. 鮮明・詳細には思い出せないが、体験したことを知っているという感じはする。3. ある出来事を体験したと感じはするが、確信は持てない。
Q4	視野/観察者 (図示も)	思い出した出来事を頭の中に思い浮かべた時、どのように見えますか? 1. 思い出した出来事を、あたかも自分の目を通して見ているように感じる。2. 思い出した出来事を、写真や映画のシーンのように外から見ているように感じる。3. 自分の目を通して見るように感じたり、外から見ているように感じたりする。

1. 思い出した出来事を、あたかも自分の目を通して見ているように感じる。

2. 思い出した出来事を、写真や映画のシーンのように外から見ているように感じる。

3. 自分の目を通して見るように感じたり、外から見ているように感じたりする。

